二〇二五年度　一般選抜　学力検査（国語）

# 現代の国語、言語文化（古文・漢文を除く）

解答番号 1 ～ 30

**一**　問題文を読んで次の**問1**〜**問9**に答えなさい。

言語は単なるコミュニケーションツールではなく、本質的に **X** であって、人々の生活と密接に連関しながら世界をブンセツ(ア)し、おのおの独自の体系を形づくってきた。したがって、使用言語が違えば、同じ対象であっても、その見方・把握の仕方が当然違ってくる。私たちは、あくまでも言葉を通して世界を秩序だて、構造化し、認識しているからだ。つまり世界には少なくとも言語の数と同じだけ世界の見方のパターンがあり、集合的な世界観がある。(1)外国語を学ぶということは、自分とは異なる世界観を学ぶことであり、そうした世界観に触れることによって、今ある自分の世界観を相対化することにほかならない。

その場合、ひとつしか外国語を知らなければ、自分を相対化する線は1本しか引けないが、もうひとつ別の外国語を勉強すると、線は一気に3本に増える。たとえば英語とフランス語を知っていると、日本語と英語、日本語とフランス語のほかにもう1本、英語とフランス語のあいだにも、比較のための補助線を引くことができるからだ。つまり(2)3つの言語を結んだ3角形が描けるわけで、これは単に、もう1か国語やったからコミュニケーションツールがひとつ増えた、という「足し算」ではない。いってみれば、線分が面積をもった広がりになり、思考の地平が飛躍的に拡大するのであって、文字通りに「次元が変わる」のである。

**A**　大学では英語だけでなく、少なくともうひとつくらいは別の外国語を学ぶことが必要なのだ。

以上の見解は今なお有効性を失っていないと思うが、ここ数年ますます強くなりつつある(3)「英語一辺倒」の風は、こんな抵抗言説も軽々と吹き飛ばしてしまいかねない勢いである。多言語主義・多文化主義などしょせんは理想論にすぎない、世界じゅうどこに行っても今や共通言語は英語なのだから、まずは支障なく英語でコミュニケーションができるようにすることが大学の語学教育の第一目標であるべきだという議論は、もはや抑えがたい潮流となった感がある。

**B**　、世界には3，000以上もの言語があり、それと同じだけの価値観・世界観があるという事実のもつ重みは、やはり

軽視すべきではあるまい。言語がばらばらであることは、実用的観点からすれば確かにたいへん不便なことかもしれないが、もし世界にひとつしか言語が存在しなかったとしたら、これほど多彩で豊饒（ほうじょう）な文化が生み出されることはなかったはずだ。バベル（注）の塔が挫折したからこそ、私たちは意思疎通の困難さという代償と引き換えに、自分と異なる風習や思想や信仰をもつ人々の存在に触れ、自らとの差異に驚き、率直に感動することができるようになった。そして異文化へのあこがれや敬意を抱き、もっと世界のことを知りたいという欲望をもつことができるようになった。 Y は、いわば他者理解への欲求を活性化するエネルギーの根源なのである。

朝日新聞の大野博人編集委員は、ヨーロッパ総局長時代に**キコウ**(イ)した「英語が母語　幸運か不運か」と題する文章で、英国の諸大学が入学にあたって全国共通試験の外国語科目（つまり英語以外の言語）を必須としなくなった現状を報告し、「今や英語は科学技術でもビジネスでも世界の共通語。確かに実用性の乏しい外国語を学ぶエネルギーはほかに回した方が効果的という理屈もわからないではない」と認めつつも、「英語が世界共通言語ということは、実は自分たちだけの言葉がない、ということも意味する」というロンドン大学経済政治学院（ＬＳＥ）語学センター長のニック・バーンの言葉を紹介し、「自分と他者の二つの言葉を知ることは［……］(4)自分たちの社会や文化をより広い視野の中に置いて相対化するうえで重要なかぎになる」とも述べている（朝日新聞２００９年３月２９日付朝刊）。

C 英語のネイティブスピーカーであるからといって、英語以外の外国語を学ばなくてもいいということにはならないということだ。もし英語の代わりに日本語が世界共通語だったらと仮定してみると、私たちは世界中どこに行っても困ることはないだろうし、海外で仕事をする上でもずいぶん楽ができるだろう。しかしその状態に胡坐（あぐら）をかいていっさい外国語を学ばなければ、他の言語を母語としながら日本語を学んだ人々と対等に渡り合えるだけの視野の広がりや思考の深まりを獲得することはできないにちがいない。これは言葉というものが単なるコミュニケーションツールではなく、人間の思考や感性そのものを支える根源的な要素であること、さらにいえば思考や感性そのものであることを意味している。だからこそ、英語一辺倒でよしとする風潮

に安易に同調することはできないのである。

以上の前提を踏まえつつ、私はここで「リベラルアーツとしての語学教育」[5]という観点を提示してみたいと思う。「リベラルアーツ」というと、多くの人はいわゆる「一般教養」を思い浮かべるであろうから、ああ、また「実用語学と教養語学」という昔ながらの対立図式をもちだすのかと思われるかもしれないが、私が言いたいのはそういうことではない。

D リベラルアーツとは本来、単なる「幅広い知識」とか「専門に**カタヨ**[ウ]らない教養」を意味する概念ではない。自著からの引用で恐縮だが、「重要なのは『リベラル』という形容詞に『人を自由にする』、すなわち『解放する』という動詞的な意味がこめられているということである。つまりリベラルアーツとは本来、人間を種々の拘束や強制から解き放って自由にするための知識や技能を意味する概念なのだ」(『大人になるためのリベラルアーツ』、東京大学出版会、２０１６年)。

ここで言及した「種々の拘束や強制」の例としては、「知識の限界」「経験の限界」「思考の限界」「視野の限界」などが考えられるが、外国語はそのすべてに関わってくる。たとえば日本語しかできない人間は、ごく単純に、外国語で書かれた文章を理解することができないという意味で「知識の限界」に囚(とら)われており、外国人と会話することができないという意味で「経験の限界」に囚われている。また、外国語による考え方の筋道が理解できないという意味で「思考の限界」に囚われており、外国人の世界観が目に入らないという意味で「視野の限界」に囚われている。だから外国語を学ぶことは、これらの限界を打ち破り、言葉本来の意味における自由を獲得するために必須の手段なのだ。「リベラルアーツとしての語学教育」とは、外国語学習を通して学生たちをさまざまな限界から解放する教育にほかならない。

この考え方は、先に触れた英国のケースにも適用できる。日本語しか知らないことが日本人にとって限界であるとすれば、英語圏で生まれ育った人々にとっては「英語しか知らない」ことがひとつの限界であると考えるべきだろう。だから彼らにとって英語以外の外国語を学ぶことは、まさにその限界を乗り越えるためのリベラルアーツになりうるはずなのだ。

このように語学教育をあらためて意味づけるならば、解放の契機はひとつだけでなく、複数あったほうがはるかに効果的であるという主張も自然に納得されるのではなかろうか。もちろん実際問題としては、英語だけでも手一杯の学生たちに過重な負担を強いることはできないかもしれないが、さほど負荷をかけない形で別の外国語の初歩だけでも学ぶ機会を提供できれば、以上に挙げた種々の限界、特に「思考の限界」や「視野の限界」から学生たちを解き放つ力は何倍にも増すにちがいない。

（石井洋二郎（いしいようじろう）　「リベラルアーツとしての語学教育」『ＩＤＥ現代の高等教育　２０１９年６月号』による。）

（注）バベルの塔 ―― 旧約聖書に登場する塔。人類が天に達するほどの高い塔を建てようとしたのを神が怒り、一つであった人間の言葉を混乱させて互いに通じないようにしたという話が記されている。

**問1** 傍線部(ア)〜(ウ)と同じ漢字を含む熟語を、次の各群の①〜⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、1〜3。

(配点6点)

(ア) ブンセツ 1

① 復帰をセツボウする。
② セツレツな作品といえる。
③ セツゼイの対策をする。
④ セツビにお金をかける。
⑤ 部品をセツゴウする。

(イ) キコウ 2

① 駅のコウナイに入る。
② コウサクチを放棄する。
③ 世界がキョウコウに陥った。
④ 脚本のソウコウを練る。
⑤ 客船で世界中をコウカイする。

(ウ) カタヨらない 3

① おヘンロさんをもてなす。
② 不良品をヘンピンする。
③ 子どものヘンショクに悩む。
④ チョウヘン小説を読む。
⑤ 組織のテイヘンを支える人々。

問2　空欄 X ・ Y を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、 4 ・ 5 。

（配点6点）

X　4

① 自己表現
② 人間関係の基盤
③ 人間の本能
④ 根源的な欲求
⑤ 文化的な産物

Y　5

① 多彩な文化
② 世界への関心
③ 言語の多様性
④ 代償としての意思疎通
⑤ 世界の共通言語

**問3** 空欄 A ～ D を補うのに最も適当なものを、次の①～⑧の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし、同じ番号は一度しか選べない。解答番号は、A 6 、B 7 、C 8 、D 9 。（配点8点）

① もちろん　② つまり　③ そもそも　④ さらに
⑤ とりわけ　⑥ だが　⑦ だから　⑧ むしろ

**問4** 傍線部(1)「外国語を学ぶということは、自分とは異なる世界観を学ぶこと」とあるが、なぜそのようにいえるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、 10 。（配点5点）

① 世界には数多くの言語が存在し、人は同じ言語を使用する人々と生活する中で自分自身のあり方を認識するので、異なる言語を学べば新たな自分を見出（みいだ）せる可能性があるから。
② 人は言語を使用することで世界を秩序だてて構造化し、認識しており、自らの言語体系を独自に形成しているので、言語が異なれば世界に対する見方も人それぞれ異なるから。
③ 言語は人々の生活と密接に関わりながら地域ごとに別々に作られてきたので、世界にはさまざまな言語が多数存在し、同じ対象を指していてもその言語表現はそれぞれ異なるから。
④ 世界にはそれぞれ固有の体系をもつ言語があり、人は自らの使用言語の体系を通じて世界を秩序だてて構造化し、認識するので、言語が異なれば世界に対する見方も異なるから。
⑤ 人々は言語を使用し、互いにコミュニケーションを行うことで世界に対する見方や把握の仕方を形成する必要があるが、一つの言語だけではその形成が不十分なまま終わるから。

**問5** 傍線部(2)「3つの言語を結んだ3角形が描ける」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、 11 。 （配点5点）

① 母語と二つの外国語を通じて身につけた三つの異なる世界観や価値観が、自分の中で互いに影響し合いながら統合されて自分独自の価値観となり、創造的な思考が可能になるということ。

② 母語と二つの外国語を学んで得た語学力は、三つの異なる世界観や価値観を複合的に理解して獲得されたことで、世界のどこに行っても何不自由なく意思疎通ができるものであるということ。

③ 母語と二つの外国語を通して知り得た三つの異なる世界観や価値観を、自分の中でそれぞれ比較対照することで多元的なものの見方や考え方が可能になり、格段に思考の幅が広がるということ。

④ 母語の他に二つの外国語を学んで身につけた語学力によって、日本だけでなく世界に自分が活躍する場を広げることで思考や感性の幅も広がり、人間として飛躍的に成長できるということ。

⑤ 母語に加えて二つの外国語を通して学んだ三つの異なる世界観や価値観によって、自分がこれまでもっていた狭い世界観が打ち壊され、新たなものの見方や考え方が可能になるということ。

**問6** 傍線部(3)「『英語一辺倒』の風」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、 12 。 （配点5点）

① 英語は今や多くの分野で世界の共通言語となっているので、教育現場では実用的観点から英語以外の外国語を学ぶ労力を省き、英語のコミュニケーション能力の養成を優先するべきだという議論が勢いづいていること。

② 多言語主義や多文化主義の時代とはいえ、異なる言語を用いる人々が同じ社会で暮らす現代では、英語が共通言語として使用されているので、人々の使用言語を英語に統一するべきだという勢力が多数派であること。

③ 英語は世界中の多くの分野で共通言語となっているので、教育現場でも英語以外の外国語学習を廃止し、学生を英語に集中させることで、英語の背景にある見方や考え方を学ぶべきだという議論が高まっていること。

④ 今や英語は世界の共通言語であることは事実であり、実社会においてはまず英語でのコミュニケーション能力が求められるので、教育現場でも日本語の代わりに英語を使用するべきだという動きが活発であること。

⑤ 現代は多言語主義や多文化主義が重んじられるが、教育現場では実用的観点から英語教育が優先されているので、学生は英語でのコミュニケーションを通じて自らと異なる文化を学ぶべきだと考える人が増えていること。

**問7** 傍線部(4)「自分たちの社会や文化をより広い視野の中に置いて相対化する」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、 **13** 。 （配点5点）

① 英語以外の外国語を学び、英語圏とは異なる風習や思想や信仰をもつ人々の文化を理解したうえで、英語一辺倒になっている現在の風潮がもたらす社会的問題をあらためて見直すこと。

② 外国語を学び、その外国語を母語として使用する人々の存在に触れて互いの社会や文化の違いを実感することで、自らの社会や文化の優越性をよりはっきりと自覚すること。

③ 英語学習を通して、世界中どこにいっても支障なくコミュニケーションを行うことで多くの人々と交流し、自らの社会や文化を他の国々の社会や文化と比較しながら客観視すること。

④ 外国語学習を通して、世界には自らと異なる文化やその背景をもつ人々が存在することを理解したうえで、自らの社会や文化を広く世界との関わりの中で考える視点から捉え直すこと。

⑤ 外国語学習を通じて、世界には自分とは異なる文化や社会的背景をもつ人々が存在することを学んだ結果、その反動として自らの社会や文化に対する関心が自分の中に生まれること。

**問8** 傍線部(5)「リベラルアーツとしての語学教育」とあるが、どういうものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、 **14** 。

（配点5点）

① 学生がそれまで囚われていたわずかな知識や経験、狭い視野や浅い思考などの限界を脱し、自由に意思疎通し自己表現を可能にするための語学教育。

② 学生が外国語を単なる意思疎通の道具として用いるのではなく、学問として世界のいろいろな文化を広く学び、高い教養を身につけるための語学教育。

③ 学生が囚われる知識や経験の乏しさや、思考力や精神の弱さなどの限界を打ち破り、自分の能力を十分に発揮して世界の人々と競うための語学教育。

④ 学生が誰とでも支障なく意思疎通し、対等に渡り合える視野の広がりや思考の深まりを獲得し、高い語学力を駆使して世界で活躍するための語学教育。

⑤ 学生が囚われる知識や経験の乏しさ、視野や思考の狭さなどの限界を突き破り、母語しか知らない自己を解き放ち自由になるための語学教育。

**問9** 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、15。（配点5点）

① 言語とは、単なる他者との意思疎通の道具ではなく、他者とは異なる独自の世界観を自ら構築するためのものである。

② 実用的観点からのみ英語教育を捉える人々は、リベラルアーツの本来の語義に則（のっと）った語学教育という視点を軽んじている。

③ 人は自分の価値観に囚われがちであるが、語学により異なる価値観を学ぶことで自らの価値観を一新する必要がある。

④ 仮に母語が共通語であれば、世界中どこでも自由に意思疎通ができるが、自己の思考や感性を育むことは不可能である。

⑤ 学生自身を自由に解き放つ外国語学習は必須であり、より多くの外国語を学ぶほど、彼らの人生は豊かになるといえる。

**二**　問題文を読んで次の**問1**〜**問9**に答えなさい。

「おじぎ」という行為も、人間どうしの結びつきの上では、大変慎重で細かい配慮が求められるのだが、そこには日常用と儀式用との区別がある。日常用の「おじぎ」の形式性を強めてゆけば、いく分か儀式的となることも事実である。「おじぎ」をするべきときにするべき形で行わないということも儀式的となることがある。ごく一般に儀式的といわれる場合には、通常の場合よりも、より形式的、より厳粛な形で行う、という点と、真実味のない空虚な形という点の二重の意味が含まれている。

動物の場合でも、「あいさつ」も含む儀式的行動の特徴を、ローレンツ(注1)がいまでは**コテン**(ア)的になった説明の中で、まず第一義的にコミュニケーションのためであると指摘し、それが日常の他の運動のパターンと異なり、「よく目立ち、明確で、しかも容易に認知できること、また動物行動の進化過程のもっとも進行の速いものの一つであること」、そして、それらの行動が「信号として機能すること」と述べている点は注目に値する。「儀式化」された行動の特徴は、コミュニケーションという機能を「獲得」したものであって、それは日常行動とは異なる「目立った」行動であり、形態的にも他の運動と変(かわ)った性格を有している。

(1)この特徴は、「あいさつ」に示される人間の行動に共通する。「あいさつ」は明らかに日常的な行動のうちにあっても、他の行動とレベルを異にする性質をもち、いうまでもなく信号として機能している。動物の「儀式化」とちがう点は、人間の「あいさつ」行動には日常的と儀式的と区別されるところがあるという点である。いずれも信号として機能するとはいっても、その性格は先に触れたように異なるのである。

それならば、人間の行動における日常の行動と儀式的行動とのちがいは、どういう点に求められるのであろうか。サリー・F・ムーアとバーバラ・マイヤーホフ(注2)(注3)は、人間における「儀式的行動」の特徴を次の六点に示す。

一　繰り返し行うものであること。

二　意識的に行うものであること。

三　「特別の」行動ないしスタイルをもつ。
四　秩序立ったものであること。
五　喚起的で顕示的なスタイルをもつ（演ずること）。
六　「集合的」次元に属する。

簡単に説明を加えると、一に関していえば、「儀式的行動」は同じ動作や行為を「あいさつ」のようにいく度も繰り返すことが特徴である。行う度にちがった形をとっては［X］や伝達の形とならない。形と内容との同じものの繰り返しによって意味と機能が生ずる。

二については、いうまでもなく他の日常行動と異なり、何事かを積極的に意識して行うことを意味し、〝自然発生的〟な行動とははっきりと区別されるのである。

三の特徴は、「儀式的行動」で示される動作もことばも、記号や象徴も、独自の仕方で行い独自のものを用いるということである。それによって他の日常行動とは明らかに異なるレベルが示される必要がある。

四は組織された意図的な行動であることから、それ自体に独自の「秩序」を備えた「過程」を有することになる。この「秩序」と「過程」の全体が、日常的なものとはちがって、大げさな「誇示的」な形となる。目立つ〝異様な〟言動が含まれる。

五の喚起的というのは、それがイベントとして日常の連続性の中に不連続を打ち込む形となるところから、とくに注目される行動となって、人びとの精神と感情の両方に対して〝［Y］〟働きかけがなされることを指す。日常の一般的行動とちがって、刺戟的（しげきてき）で活性化させる活動である。

六は社会的な意味をもつ行動であり、集団的な行動であることが普通であることを指す。個人が一人で行う場合はありうるが、それが社会的に有意味な形となるのは集団の次元であり、個人の部分も含んだ全体にそのもっとも重要な特徴があるということになる。社会的なメッセージを発するものであることも忘れてはならない。

以上の六つの特徴は、動物の場合の特徴とも共通する点を含んでいるが、(2)動物行動学者がローレンツの例のように時として動物行動の鋳型をもって、人間行動のすべてを解明することが出来るかのように主張することに対しては、この特徴を見てもはっきりと解るように問題のとらえ方に大きなズレがあるとしかいいようがない。動物の「儀式化」と人間の「儀式的行動」とでは、特徴点としていくつかの共通はみとめられることは事実であっても、一方をもって他を説明することは出来ないし、その逆もまた出来ない。この点については別のところでまた論ずるが、行動の観察と、その行動に関する意味の解明とは、必ずしも重ならない。動物行動の解釈に際してとられてきた「擬人化」の根拠の薄弱なことをよく考える必要がある。

「あいさつ」の問題に戻ろう。人間はこの行動に文化による形式を通してさまざまな社会的意味を託している。「あいさつ」は決して単純な同じ行動の繰り返しではなく、時と状況に応じて多様に変化する複雑なメカニズムをもっているし、意味もそれによって変わる。伝統を背景に社会的慣行に従った行動ではあるが、常に新しい要素が付け加わったり、新しい形が生まれたりしてゆくし、また消滅してゆく要素もあるわけで、そこには創造と(イ)**タイカ**のダイナミズムがみられるのである。動物行動と同じレベルを基本に有するとはいっても、それはごく限られた部分に限定される。**A**、見知らぬ人どうしが出会いがしらに、とっさに交わすような半ば無意識的といってよい反応行動でも、何らかの「あいさつ」がとりかわされることがあるわけだが、こういう場合であっても、そこにはある種の文化的な形式性が入り込む。(3)あっと手をあげたり、口を手で覆ったりすることにも、その社会に共通する「あいさつ」の形が発現しよう。動物的といえる行動は、すでに他の多くの面で指摘されているように、ごく少ないのである。その他の場合となると、すでに触れた「おじぎ」のように、千差万別であり、相手と時と状況を慎重に配慮したすこぶる強い社会的表現がこめられている。

**B** 重要なことは、人間の「あいさつ」の場合、同じ人間どうし、人と人との間で行われるばかりではないという点である。人と人以外の場合にもそれが行われる。人間はたとえば超自然的存在を相手に「あいさつ」を行う。神社(ウ)**ブッカク**といわず山岳や太陽や月といった自然を相手にしても、そこに人間を越えた存在を見出したときには必らず何らかの形で「あいさつ」をする。

また写真や形象のような物に対しても「あいさつ」をする。こうした人と人以外のものに対して行うときには、それは通常の「あいさつ」を越えて「拝礼」となる。「あいさつ」一般と「拝礼」とは社会的に区別される。また両者の中間にあるような行いとして、特別な場や集団においては「敬礼」が行われる。

いま仮りに、ごく一般の人と人との間の日常的レベルでの形を「あいさつ」として、それの特別な場合を「敬礼」とすると、人以外の人を越えた「超自然」に対するのは「拝礼」となり、「あいさつ」にはこの三類型がみとめられることになる。それが行われるレベルに明らかに差がみとめられるのだが、「あいさつ」から「敬礼」そして「拝礼」と段階を異にして行くに従って、その行動は動物行動のレベルから遠ざかってゆく。(4)

C この三つのレベルと厳密に対応するものではないが、「あいさつ」という人間行動には次の三つの次元が見られるということもいえる。

一　動物的
二　社会的
三　超越的

この三つのレベルは、完全に区別されうるわけではないとはいえ、やはりどこかで分かれていることは事実である。

一では動物行動と類似した点が多いといっても、「あいさつ」のすべてが「儀式的」では人間の場合ないのであるから、二と三へと移行するにつれてはじめて「儀式性」が明らかになるのである。その点、動物においてはこのような細分化は見られない。「あいさつ」行動そのものが「儀式化」なのである。二の場合は、E・ゴフマン(注4)が「相互行為的儀式」とよんだものが中心となる。それはまた「あいさつ」行為の特徴をレイモンド・ファース(注5)が次の三点あげていることと重なる。すなわち、

(1)注意を喚起すること。他人の注意を惹くことが「あいさつ」行為の第一義的な目的である。声をかけること以外に視線を投げたり、手で叩いたり、手を振ったりして、他人の関心を自分に引きつけることによって、もっとコミュニケーションをしたい

という記号を送る。

(2)アイデンティフィケーション(注6)を得るために行われる。個人が他人と互いに同じ社会交流の枠組を共有していることを確認して、次の行動へと移ることが出来るようにする。

(3)社会的接触において個人は常に他人とのある不確かな関係におかれていて不安であるが、「あいさつ」によってその不確かさを消去しようとする。うまくこれが行えれば、他人との接触における不安が除去されて、コミュニケーションが可能になる。地位や社会関係における距離の問題がここに示されることになる。

以上はごく常識的な指摘だが、社会的な次元での特徴と見て差支(さしつか)えない。ここでは一方で動物的な行動と接し、他方で儀式的な行動になるという形式と意味の振幅が見られることが重要な点である。

そこで、三の超越的とここでよぶ次元が出てくる。これは(5)象徴的次元といってもよい。「あいさつ」の対象として神や仏や霊など超自然的なものに対して向けられるような場合である。神社で神に対して向かう場合には、「あいさつ」行為も通常の形だけではすまない。「拝礼」とよぶ特別に入念な形式が要求される。これも「あいさつ」にはちがいないが、同じ形を人と人との間で行えば、これは異常な形となる。もちろん、相手は超自然物だけでなく、王や生神(いきがみ)や偉人に対するときにも「拝礼」の形はとられる。 D 、それは日常の「あいさつ」の範囲を大きく越えている。そうした「あいさつ」は普通の人間にとってはごく稀(まれ)にしか行わない特別の機会の行動となる。「あいさつ」に代表される人間の行動に焦点を当てて、日常の行動と儀式的行動との関係を見てきたが、行動が儀式的になるに従って形式性と象徴的な含意が大きくなる傾向が見られるのである。

(青木保(あおきたもつ)『儀礼の象徴性』による。)

（注１）ローレンツ――――――オーストリアの動物行動学者（１９０３～１９８９）。
（注２）サリー・Ｆ・ムーア――――アメリカの文化人類学者（１９２４～２０２１）。
（注３）バーバラ・マイヤーホフ――――アメリカの文化人類学者（１９３５～１９８５）。
（注４）Ｅ・ゴフマン――――――アメリカの社会学者（１９２２～１９８２）。
（注５）レイモンド・ファース――――イギリスの社会人類学者（１９０１～２００２）。
（注６）アイデンティフィケーション――身分証明、本人確認の意。

**問1** 傍線部(ア)〜(ウ)と同じ漢字を含む熟語を、次の各群の①〜⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、16〜18。

(配点6点)

(ア) コテン 16

① 事態がキュウテンした。
② テンジョウから雨漏りがする。
③ 和食のメイテンを訪れる。
④ スポーツのサイテンを開く。
⑤ テンジョウ員が先導する。

(イ) タイカ 17

① タイネツの容器に入れる。
② 本の返却をエンタイする。
③ 現役をインタイする。
④ タイゼンとふるまう。
⑤ 制服をタイヨする。

(ウ) ブッカク 18

① 寺の中で特に神聖とされるクカク。
② 江戸時代のジョウカクを訪ね歩く。
③ 建物のチュウカクとなる構造物。
④ ナイカクが責任をとって総辞職した。
⑤ 野生動物がイカク行動をとる。

問2　空欄 X ・ Y を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、19 ・ 20 。

（配点6点）

X　19

① 信号
② 行動
③ 示唆
④ 日常
⑤ 所作

Y　20

① 多様な
② 異常な
③ 陳腐な
④ 詳細な
⑤ 平易な

**問3** 空欄 A ～ D を補うのに最も適当なものを、次の①～⑧の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし、同じ番号は一度しか選べない。解答番号は、A 21 、B 22 、C 23 、D 24 。（配点8点）

① なるほど　② だから　③ すなわち　④ さらに
⑤ あるいは　⑥ たしかに　⑦ ただし　⑧ たとえば

**問4** 傍線部(1)「この特徴は、『あいさつ』に示される人間の行動に共通する」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、 25 。（配点5点）

① 動物の儀式的行動は、コミュニケーションの働きをもつため、日常の他の運動とは異なってはっきりと目立ち、形態的にも変っているという特徴をもつ点が、人間の「あいさつ」行動と共通するということ。
② 動物の儀式的行動は、もともとコミュニケーションするための行動として始まったが、やがて日常的な行動として発展し機能するようになったという点が、人間の「あいさつ」行動と共通するということ。
③ 動物の儀式的行動は、日常の運動パターンとは異なり、自己が明確に群れの中で目立つよう、他の個体とは違う独自の形態をそれぞれもつという特徴がある点が、人間の「あいさつ」行動と共通するということ。
④ 動物の儀式的行動は、コミュニケーションの機能があるため、より厳粛な形で行われる一方、真実味のない空虚な形に見える場合もあるという特徴をもつ点が、人間の「あいさつ」行動と共通するということ。
⑤ 動物の儀式的行動は、日常の他の運動とは異なってコミュニケーションのために行われるものであり、進化過程でもっとも進行が速かったという特徴をもつ点が、人間の「あいさつ」行動と共通するということ。

**問5** 傍線部(2)「動物行動学者」とあるが、筆者はここで「動物行動学者」についてどのように述べているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、 **26** 。 （配点5点）

① 動物の「儀式化」と人間の「儀式的行動」とでは特徴としていくつか共通点があるのは事実だが、「動物行動学者」がその共通点をもって日常の人間行動の意味を解明できるかのように主張するのは誤りである。

② 動物行動の解釈における擬人化の根拠は薄弱であっても、「動物行動学者」が動物行動の観察によってその特徴を解明したことを踏まえ、人間行動の特徴との共通性を明らかにしたことはある程度評価できる。

③ 動物行動と人間行動には共通点があるとはいえ、行動観察と行動の意味の解明は別であり、「動物行動学者」が動物行動の観察から見出(みいだ)したパターンをすべての人間行動にあてはめ、その意味を解明できるとはいえない。

④ 「動物行動学者」が、動物の「儀式化」行動の観察から導き出したパターンを人間の「儀式的行動」に重ね、両者の共通性をとらえた点は評価できるが、両者に共通する「儀式」の意味を解明したわけではない。

⑤ 動物行動と人間行動にいくつか共通点があるのは事実だが、あくまで行動のパターンのレベルでの話であり、「動物行動学者」が動物を人間と同一視して動物行動のすべてを解明できると主張するのは容認できない。

**問6** 傍線部(3)「あっと手をあげたり、口を手で覆ったりすること」とあるが、筆者はこれによってどういうことを述べようとしているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、 27 。(配点5点)

① 人の「あいさつ」行動は単純な同じ行動の繰り返しではなく、時に状況に応じて半ば無意識的といってよい反応行動として現れる場合があるが、それらは例外的に動物行動と同じレベルのものであるということ。

② 人がとっさに交わすような無意識的といえる反応行動は、動物行動と同じレベルのものであるが、人が意識的に交わす「あいさつ」行動はその社会の文化的な形式を通してさまざまな社会的意味が託されているということ。

③ 人の「あいさつ」行動とは、半ば無意識的なとっさの反応行動ではなく、その社会特有の文化的な形式をもつ行動として習慣づけられた意識的な対応であり、状況に応じてさまざまに変化する複雑なメカニズムをもつということ。

④ 人がとっさに交わすような半ば無意識的と思える反応行動は、動物的といえる「あいさつ」行動であり、相手と時と状況に慎重に配慮した社会的表現がこめられた人間の「あいさつ」とは異なるものであるということ。

⑤ 人の「あいさつ」行動は、半ば無意識的に思える行動であってもその社会に共通する文化的な形式があり、時には状況に応じて多様に変化しながら、その行動を通してさまざまな社会的意味が表現されているということ。

**問7** 傍線部(4)「その行動は動物行動のレベルから遠ざかってゆく」とあるが、なぜそのようになるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、 28 。 （配点5点）

① 人間の「あいさつ」行動には、一般とは離れた特別な場や集団で行われたり、または人以外に対して行われたりする場合もあり、その多様な行動のあり方は動物行動に比べて複雑であるから。

② 人間の「あいさつ」行動には、通常を越える規模の大きな集団で行われる段階や、人同士ではなく大自然を相手に行われる段階があるので、その行動範囲は動物の行動範囲を大きく上回るから。

③ 人間の「あいさつ」行動には、人と人との間で行われる場合とは異なり、人の知性をもって人以外の対象を想定して行われる段階があり、その行動は動物の知的レベルをはるかに越えているから。

④ 人間の「あいさつ」行動には、特別な場や集団で行われる段階や、さらに超自然的存在に対する次元で行われる段階があることが動物行動と異なり、段階が進むにつれて象徴的な意味合いが大きくなるから。

⑤ 人間の「あいさつ」行動には、特別な場や集団で行われる段階や、さらに人を越えた存在に対して行われる段階があり、その行動は日常の現実世界ではなく異次元の仮想世界で行われるから。

**問8** 傍線部(5)「象徴的次元」でのあいさつ行動はどういうものか。その説明として最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 29 。（配点5点）

① 超自然的な存在ではなく、集団の最高位の人間に対する「あいさつ」であり、人々が集団化して統一的な動きで拝礼することで対象への敬意や崇拝が表現されている行動。

② 超自然的な存在に対するレベルでの「あいさつ」として、ある部分では動物的な行動とほとんど同じだが、その他の部分では特別に入念に非日常的な形式で行われる行動。

③ 超自然的な存在に対するレベルでの「あいさつ」として、日常の範囲を逸脱した特別な形式をもつ拝礼により、人間を超越した対象への崇拝や信仰などの意味を表現する行動。

④ 神や仏や霊など超自然的なものに対する「あいさつ」であり、誰もが日々の生活の中で繰り返し入念に拝礼することにより、自らの信心や信仰を強化するための行動。

⑤ 神や仏や霊などに限らず、自然や物象に対するレベルでの「あいさつ」として、人を対象に行うことはない形式をもつ拝礼で、超越的存在に対する特別な意味を表現する行動。

**問9** 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、**30**。（配点5点）

① 人間のあいさつには日常用と儀式用との区別があり、厳粛な形で行う儀式用の行為は真実味のないものとされる。

② 動物行動学者は動物のあいさつ行動を、人間のコミュニケーションと類似するという理由で「儀式化」と名付けた。

③ 人間が行うあいさつは、すべて互いのコミュニケーションのために行われる点で動物行動の儀式化と同じである。

④ 人間のあいさつ行動にはさまざまなレベルがあり、日常の行動から離れるに従って形式性と象徴性が大きくなる。

⑤ 人間にとってのあいさつは、自己の存在を他者に認識させるとともに、自らの独自性を伝える儀式的行動である。